

多賀豊后守高忠畫像問答

五

問 多賀三太夫中原常政

答 伊勢平藏平貞次

一 問 高忠畫像の烏帽子に惣袂をいひつ

る者惣袂あるべきや、これゆゑ古画より惣袂

なきをいふに古のウチヤ緒なくしてゑは、

をいふウチヤ忍不しと申て人の好むものいふ

所のより、中後画像より強々行へ又ハ喜提不

に別々ありはへてウチヤ忍不しの神、

ふ 引ひかりすまを

あり式を金銀の箔紋よりひき付きをいふ
しはるひの付くや今世切付紋と申す物に
て後より墨に之を繪の具ありて書しりも
之篇世のふとく深付ないや一はりのせえは
又象の紋にいきらす何の事とぬみふすかせ
付ゆりもさくは画像の紋ハ露びりこくあふ
へて後

一 間より弓に白漆不つけあるりりりり
一 間音是画工のあやまり 三ぬり弓に白弦かくる
り射方方故実には世之り然ては画工弓矢

一 間の古実り案内には意かきあるとんえは
まは左に見えあるはと皆不故実かて後
一 間弓に下矢すりの世之のりりり
一 間音三断のああるべくは是又画工のあやまり
あり

一 間附を藤のく巻ある物と見ふ物いり
一 間音附のああるり故実には世之右は所
一 間矢を墓目とて見えすり何
名墓目にして世之の一手志んとうは飛つて
ひさしとも弓の大きうに合して音志んとう

女へうのうをんを祓ひし齋屋原に於て
感一遠く許容せりふくを待りたりと
て長谷川錦耕子重に倚りて是を信字せし
身今此行字はふ不毫未だ遠ひなく一に於て
此れ永く常貴取あり可縁に行人て祭祀を
奉せ志免んと欲す積年の古書に達し擗躍
すふくあまふあり因る研の先字を記し謹み
来由を記す云

安永五年丙申十一月下旬

多賀 中原 常貞
多賀 中原 常政
伊缺平藏貞丈代筆